

京きやうの花はな（安藤残雨あんとうざんう）
花はなざかりに京きやうをみやりてよめる（素性法師）

短歌作者 古今集の歌人。俗名を良岑玄利といって、清和天皇の御代に左近将監となった。のちに出家して権律師となつた。三十六歌仙の一人。

見みわたせば 柳やなぎさくらを こきまぜて

解説 平安京の春の風景を捉えた名歌。

都みやこぞ はるの にしき なりけり

語釈 ※見わたせば＝遠くみやること。 ※柳さくらを＝柳は当時朱雀大路に、街路樹のように植えられていた。柳も桜も当時の人々に愛好された植物である。 ※にしきなりける＝柳と桜が入り交じつた美しさを春の錦と言つた。

鐘かね音は 黒谷くろたにか 知恩院ちおんいんか

通釈 遠く見渡すと、柳の緑と桜の白い色が入り交じつて都こそ春の錦であるなあと。

京の花

解説 京都に咲く花の風情を詠じたもの。

花はなに 明あけ 花はなに 暮くるる 旧都きゆうとの 春はる

語釈 ※黒谷＝比叡山西塔の北谷。法然が学び浄土教開創の糸口をつかんだ青竜寺がある。 ※知恩院＝浄土宗総本山。 ※

嵐山あらしやま 御室おむろ 又また 清水きよみず

旧都＝昔の都。京都のこと。 ※嵐山＝桜紅葉の名所。 ※御室＝宇多天皇が建立し、退位後その御所とした。仁和寺の別名。 ※清水＝清水寺。 ※遊子＝旅人。 ※酔吟＝酔つて詩や歌を口ずさむこと。

遊子ゆうし 酔吟すいぎん 杖つえを 引ひいて 巡めぐる

通釈 鐘の音色は黒谷か知恩院か。京都の春は花に明け花に暮れる。嵐山、御室、そして清水寺も一面の花。旅人は詩や歌を口ずさみながら杖を引いて花の京都を巡るのである。